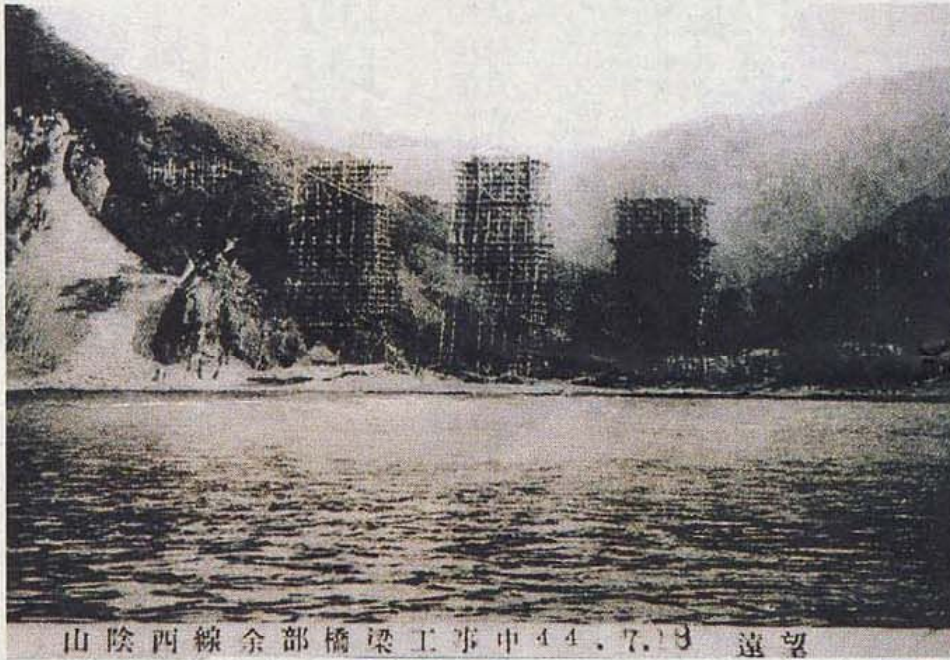
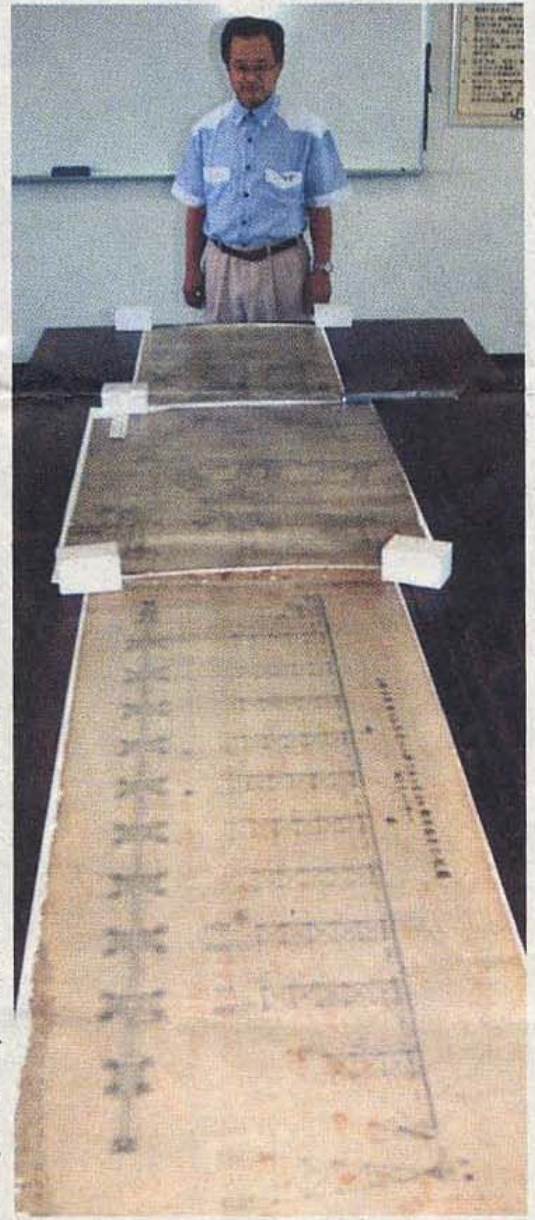


余部鉄橋 設計図見つかる



山陰西線余部橋梁工事中 44.7.19 遠望



産経新聞
平成18年(2006年)8月24日

見つけたのは「餘部橋梁全体図」(縦55^{センチ}、横151^{センチ})▽第1号橋脚の構造図(縦71^{センチ}、横108^{センチ})▽橋脚部材の数量や寸法、重量などを記録した材料表(縦56^{センチ}、横87^{センチ})。いずれも和紙

類庫の整理をしていた際、大型の封筒の中から折りたたまれた状態で見つかった。全体図は288分の1の縮尺で、橋脚計11基の高さや長さなどのほか、橋脚の間隔などをミリ単位で詳細に記載。鉄材の数量、種類、寸法などを詳しく記した材料表には英語の書き込みもあり、当時の

明治末期に作製された兵庫県香美町のJR山陰線・余部鉄橋の設計図3枚がJR西日本豊岡鉄道部で見つかった。当時の高い建設技術がうかがわれるが、保管状態が悪く、全体に傷みが激しい。同鉄道部は原寸大の写真を25日から地元で公開する。

約90年ぶりに見つかった余部鉄橋の設計図の写真
23日午後、JR西日本豊岡鉄道部
で、黒色のインクで手書きされた。余部鉄橋の建設が始まったのは明治42年12月。設計図はこの時期のものともみられ、今年5月、同鉄道部の職員が書

最先端の技術が集められていたことがわがわが。構造図には、図面の制作者とみられる「SEKIYA」のローマ字表記もあった。余部鉄橋は明治45年3月に

完成。トレスル(橋脚)式としては日本最大の規模で、高さ41・45^{メートル}、長さ310^{メートル}。橋脚全体の老朽化が激しいことから今年度中にコンクリート橋への架け替え工事が始まるが、完成当時の資料などは、これまで、ほとんど見つかっていなかった。

1世紀前 高い建設技術水準

地形から欧米式に

鉄道史学会元会長の青木栄一・東京学芸大名譽教授(交通地理学)の話
「明治期の鉄橋といえば、レンガや石積みが主流。余部鉄橋は海岸線を通る地形の問題から鋼材をつかった欧米式の鉄橋にするしかなかった。設計図は当時の鉄道技師の技術の高さを実証するものだ」